

2019 年度 第 20 回講演会 記録

日 時	2020 年 2 月 22 日
会 場	此花会館梅香殿
講 師	東京大学名誉教授・国際日本文化研究センター名誉教授 尾本 恵市 先生
演 題	人類学者の社会的責任
備 考	参加者 140 名（聴講 1 名含） 記録 飯田正恒

はじめに

【田中克先生】

今年度のテーマ「確かな未来の原点を探る」の最後を飾るのにふさわしい尾本恵市先生をお招きすることができました。新型コロナウイルスによる感染が拡大しつつある中、尾本先生はシニア自然大学校自然学講座の皆さんの熱意を大切に思われ、東京から大阪までお出でいただきました。

尾本先生は狩猟採集民の研究で大きな功績を残されましたが、私たちも 2017 年 5 月にタイガフォーラム代表野口栄一郎さんにご講演していただき、2018 年 9 月にはウスリータイガでの自然観察会で先住民族ウデへの人びととの交歓を通して未来を考える原点を体験しました。2018 年 5 月 8 日に東京国際文化会館で開催されたシンポジウム「自己規制する文明は可能か？」は、尾本先生、資源環境ジャーナリスト谷口正次先生、経済産業省商務情報政策局審議官・前田泰宏さんが現在の狂ったような物質文明を「自己規制する文明」へ転換する可能性について鼎談されましたが、そのなかで尾本先生はヒトの原点に立ちかえることが大事だと述べられました。人類学者として狩猟採集民族の調査研究などを 40 年近く携わってこれたいろいろなご経験と未来への思いを披露していただき、私たちの参考にしたいと思います。

【尾本恵市先生】

田中先生のお話しにもありましたが、外出は私にとって命がけでして（笑い）、が感染すると、「大阪で、80 才台男性、中国渡航歴なし」と紹介されるのですが、大勢の皆さんがこの会場にお集まりになる予定だということを聞きまして、これは行かなきゃ大変失礼だと思い、かけつけてきました。

今日の演題は「人類学者の社会的責任」としました。よく人類学者をやっているという、「文化人類学」ですかと聞かれます。これを聞くと無性に腹立たしくなるのですが、その理由は、人類学には文化人類学だけでなく、いろいろな分野があることを紹介したいと思っています。でなければ「人類学者の社会的責任」のお話しはできません。自然科学に基づく人類学だけでもだめです。やはり文・理両者が合体しないと無理なことだと思います。

椅子に座ってお話しさせて下さい。大学で講義する時、寝ている学生が多いのですが、時には H な内容の話をすることがあり、するとパッと眼をさまし聞いてくれます（笑い）。

今日は学生と違い、熱心な方が多いのでそんなことはないでしょう。



人類学とは

私が好きな言葉に、プラトンの“世界を構成する「自然」、「偶然」、「人為」のうち前二者がより重要である”というのがあり、名言だと思います。「偶然」というのは、ヨーロッパのキリスト教社会では存在せず、

全て神様が決めたのだと考えます。しかしキリスト教が現れる前、プラトンはギリシャで「偶然」は重要な世界の機序であると言っているのです。しかも大事なことは「自然」と「偶然」は人間が決める「人為」より大事だということです。私もそう思います。

ところがこれに反対するのがデカルトで、彼の“我思う、故に我あり”ですが、要するに人間がいて初めて世界があり、人間が自然を支配するという考え方なのです。ヨーロッパの哲学者はこの考え方に沿った考え方をする人が多いです。しかし、有名なフランスの社会人類学者C・レヴィストロース（1908年～2009年）は“世界は人間なしに始まり、人間なしに終わるだろう”と言いました。これは見事にデカルトの考えを否定した言葉ですね。

私は始め、東大教養学部理科Ⅱ類に入学したが、医学部受験に失敗、理系の学部専門課程では適当な居場所をみつけることができず、文学部のドイツ語科に進学しました。このあたりの経歴は私の著書『ヒトと文明』に告白しています。そこで理学部の鈴木 尚先生との出会いがあり、勧められて自然人類学を志すことになりました。

さて、文科と理科の区別とは別に、個人のメンタリティー（思考方法）には2つのタイプがあるようで、私は②のタイプになるのでしょうか。

メンタリティーの二つの類型

① 線型思考、数理（代数）的、論理的、左脳優位？

法則性追求、スペシャリスト、「単純なもののほど美しい」⇒ 数学表現

「狭く深く」⇒ 物理学者

② 離散型思考、形象（幾何）的、右脳優位？

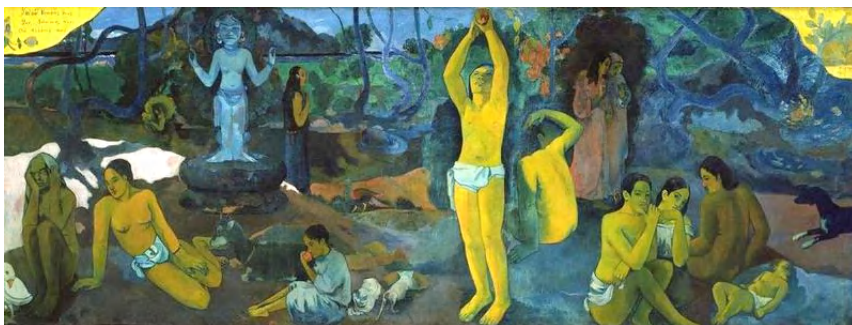
直観的、多様性追求、ジェネラリスト、

「複雑なもののほど美しい」⇒ 比喩表現

「浅く広く」⇒ 人類学者

ポール・ゴーギャンの三つの謎

ゴーギャンは下の絵の左上に「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか」と書いています。驚くべきことにこの三つの謎は人類学の教科書の1ページ目に出てきてもよい内容で、人類学だけでなく人間を扱う全ての学問の目的といってもよいことなのです。



1. 人類学（Anthropology）とは？

人類学という学問は、もともとヒトという動物（ホモ・サピエンス）、及び過去に存在した類縁種の特異性、多様性、歴史性（進化）の研究や教育をする分野で、霊長類学（Primateology）、先史考古学（Prehistory）、遺伝学（Genetics）と密接な関係があります。

ヒトをどのように見るかということ「ヒトは文化を持つ動物」であると。サルも文化をもつのですが、ヒトは文化なしでは生きられない動物です。人類学は、もとは文・理両面を扱う総合学問でしたが、

現在では文系と理系を区別する制度のため、自然人類学と、文化／社会人類学に分かれてしまいました。
 はたして総合人間科学が可能か？ 私はずっと考え続けています。

ヒトの特長

ヒトはどのような動物か？

○「人類」とはヒトおよびその祖先で、過去には猿人、原人、旧人など多くの種類がいました。

その特徴は直立二足歩行、歯・顎が縮小し、石器や火を使用したことです。

○「ヒト」はホモ・サピエンス、新人といわれおよそ 20 万年の歴史しかありません。体の形はあまり変わりませんが、大脳新皮質・前頭葉が発達し、概念思考して言語を持ち、価値判断し、芸術を行うのです。

○「人類学的人間像」によれば、ヒトは文化に依存し、文明をつくる動物です。

そのように言うと、さて「文化」と「文明」はどう違うのか？となりますが、後に触れます。

人類学者列伝

○坪井正五郎

日本の人類学の父といわれる坪井正五郎は、明治時代に東大の前身である理科大学に我が国で初めて「人類学」の講座を設け、その内容はほとんどが人間に関する博物学でした。この人は元々理系の学者ですが、文理両面の研究を追究した総合人類学者で大変立派な学者。

○長谷部言人

医学部解剖学の出身で、東大に人類学教室を立ち上げた、自然人類学の大御所です。解剖学者なので骨などを大変に詳しく観察するのです。昭和初期に日本サル分布の研究を行うなど、幅広く研究した学者。

○石田英一郎

東大教養学部教授で文化人類学を開設し、日本の文化人類学の開祖といわれます。京都学連事件で獄中生活するなど波乱の人生を送った。

○今西錦司

京都大学霊長類学創設者で、日本を代表するサル学・人類学者。私も学生のころ何度かお会いした。昔はこのように素晴らしい面白い先生が多くいました。最近の先生方はあまり面白くないですね。

2. 人類進化の画期的な出来事

① 400 万年前、猿人が直立二足歩行をするようになった。

② 200 万年前、「原人」が石器・火を使用するようになった。

③ 死者の埋葬ははっきりしないが、旧人（注）～10 万年前くらいか？

（注）ヒトの進化を 4 段階（猿人、原人、旧人、新人）に分けた場合の段階の一つ。広義のネアンデルタール人類と同義と考えてよい。（Wikipedia）

④ 約 20 万年前「ヒト」（新人＝ホモ・サピエンス）がアフリカに誕生した。

⑤ 7 万年ほど前、急におしゃれになり、身体装飾するようになり、記号のようなシンボルのようなものも利用するようになった。

（最古の身体装飾として南アフリカ・ブロンボス遺跡で、貝に穴をあけ、紐でつないでネックレスにしたのであろうと思われる出土物の写真紹介）

⑥ ヒトは海を恐ろしく思い、サカナを食べることはなかったが、7 万年前には海産物を利用するようになり、次第に海に依存するようになった。アフリカの海岸の洞窟には貝殻が多く残されている。

私の教え子の海部陽介君は、3 万年前の旧石器時代にはすでに舟があったであろうと、検証する航海実験を企画し資金をクラウドファンディングで集め、私もかなりの額を出しました（笑い）。

TV で紹介されたのでご存じの方もいるかと思います。舟ができ出航するので見に来てくださいというから場所をきくと与那国島だと。遠いのであきらめました。

⑦ 5、6 万年前、ヒトはアフリカを出て各地へ。Out of Africa と言っています。勇敢な人が海の浅いところを渡って行ったのでしょうか。陸に行くより楽です。

⑧ 芸術作品（彫刻、壁画）が 4 万年まえに作られた。

⑨ 農耕・牧畜が 1 万 2 千年前に始まった。

3. 「文明」と「文化」

「文明」と「文化」の違いを皆さん説明できますか？ 実は定まった定義がないのです。

エドワード・タイラーは文化人類学の父といわれていますが、1871 年の著書で「文化または文明は・・・」と両者を区別していません。文化人類学の父といわれる人ですよ。文化と文明は全く異なるものであるのにどうして両者を区別しないのか。

ヒト以外にも文化を持つ動物がいます。宮崎県の幸島のサルはイモ洗いすることで知られますが、エサのイモを与えたところ、一匹のサルが海水で洗ってから食べるようになり、次第に他のサルがまねをし始め、やがて群れ全体がイモ洗いをするようになりました。大人のサルは、はじめは知らん顔をしていたが、子ザルの遊びが次第に群れ全体に定着し、最後には大人もイモ洗いをするようになり、文化といえるようになりました。

証明が難しいのですが、古代、陶器を作ったのは女性であろうと思います。新しい文化は女性や子供から生まれてくることがしばしばあり、私たちの研究に面白いヒントを与えてくれます。

幸島のサルのイモ洗いは、皆が同時にやり始めるのではなく、1 匹から遊びを通して広がっていきました。文化とはお互いを集めることだと考えます。代表的な例は宗教で、宗教は英語で Religion といいますが、これは集まるという意味であり、人が集まるのが文化なのです。私は、ヒトは「文化に依存し、文明を造る」動物と主張しています。

ところが、現代生物学の大勢は、人類学の主張を排し、ヒトを単なる生物の一種ととらえる考え方であり、東大人類学教室は生物科学科に吸収されてしまいました。これではヒトの未来（現代文明の諸問題）を見通すことはできないと、私は随分怒っています。人類の未来も、地球の将来も分からない。ヒトの特異性を理解しようとし、このような矮小化された生物学では仕様がな。しかし、人類学者がそれを言うとき必ず反論する人がいて、「人間中心主義ではないか、人間が一番偉いという過去の価値観をもってくるのだろう」というのです。われわれがそんな馬鹿なことをいう訳ないですよ。そうではなく、新たなヒューマニズムを模索する学問であるというのです。

私は文化と文明をつぎのように定義しています。

○ 文化 (Culture)

遺伝によらず、学習によって集団内部にひろがり、価値判断により選択され、世代を超えて伝えられる生活様式（伝統）およびその産物。全てのヒト集団は文化を持つ。文化は集団形成の原因となる。自然環境への適応能に基づくが、非適応的文化もある。

○ 文明 (Civilization)

特殊化した文化による複雑な構造を持つ社会。約 1 万年前、世界各地で独立に農耕・牧畜を開始した集団があった。富と権力の私有化が起きる。以後、正のフィードバック（注）により自働的に発達した。

人口増大を伴い地球環境に非適応的。ヒトに普遍的でない。

「文明」の定義はひとによりさまざまで、進んだ文化だという人がおり、教科書にも書いてあるが、私はそうは思わない。人類史の中で特異的な事件であった「農耕」が主要因である。

(注)正のフィードバック：A という行為をして結果 B を得た。結果 B から判断して、もう一度行為 A をするとき、それを促進するならば“正のフィードバック”といい、抑制するならば、“負のフィードバック”という。

先住民族の多様性

フィリピンと日本は地理的にもよく似ています。中国からほぼ同じ距離にあり、東側に位置する島国です。人口が約 1 億人、生物多様性の豊かな国です。自然もよく似ており山が多く、水が豊富です。しかし、先住民族に関して両国は非常に違います。

○日本の先住民族

日本の先住民族は過去には縄文人、弥生人のほかにも熊襲、蝦夷、隼人などの集団がいたに違いないのです。熊襲、蝦夷、隼人などは伝承だという意見もありますが、根拠なく伝承は生まれないので、私は存在したと思っています。しかし現在ではアイヌと沖縄のみになりました。沖縄の人を先住民族と呼ぶのは政治的な理由から反対する人がいますが、私は政治とは関係ないので、沖縄は先住民族と考えています。

○フィリピンの先住民族

フィリピンは多民族国家です。優に百を超す言語の存在は、日本とは全く違います。

- ・主要民族はタガログ、ビサヤ、モロ（イスラム）です。
- ・少数民族は全人口の約 10% で、主に山岳地帯に住んでいます。
- ・多数の先住農耕民族（イフガオ、ボントック、マノボ、マンヤン族など）がいます、彼らは約 4500 年前に渡来してきました。
- ・数万年前に渡来してきたネグリティ人でアエタ、アグタ、マヌワ族の人びともいます。

フィリピンには縄文人より古い人たちが今も生き生活しています。言語は 100 くらいあります。元々、世界のどこの国も多民族だったのですが、一つの民族に支配され単民族に偏っていきました。顕著なのは中国です。中国の歴代皇帝は隷属する国も中国文化で染めるようにした。日本はその影響を受けたが、フィリピンはなぜか影響を受けていません。

4. ヒト集団の遺伝的多様性

人類学の対象は個人ではなく、民族(Ethnic group)という集団を研究します。「日本人」といっても一人の日本人ではなく集団としての日本人です。1991 年に埴原和郎先生が日本人の「二重構造説」を発表しているので紹介します。私はこの説に部分的にしか賛成できないのですが、その理由は後で述べます。埴原先生の説は

- ① 東南アジアから日本列島にやってきた人々は縄文人である。
- ② 一方、東南アジアから中国に行った人々が北東アジアで発達し、日本列島にやってきて、弥生人となり、縄文人と混血した。

大雑把な括りで縄文人は狩猟採集民、弥生人は農耕民としています。

アイヌについて

アイヌの人たちが世界に紹介されたのは 1904 年のことです。この年にセントルイス万博があり、ミシガン大学教授の **Frederic Starr** が来日して懇願し、アイヌの人達 9 名をアメリカにつれていきました。アイヌの野外展示企画で小さな家を建て、そこで生活するのを見てもらうというものでした。人類学のために人を見世物にしたのは怪しからんと意見がありますが、1904 年当時のことを現在の感覚で批判しても仕様がなないのです。そのころ、もっとひどい人種差別があり人権侵害があった中で、この 9 人のアイヌの人達はよい扱いを受け、非常に尊敬され、地元新聞は素晴らしい民族だと報道しています。見世物といわれれば問題ですが、好意的に知ってもらえたことはよかったと私は思いますね。髭が濃くて女性は口に入れ墨をしている、そのままの姿を見てもらったのです。

(ミズーリ歴史博物館所蔵のアイヌ人 9 名の集合写真を、田辺陽子 2016 から引用し紹介された)

田辺陽子さん(注)はセントルイス万博の研究をしており、「聖路易通信」という本を 2016 年に出版しました。**Frederic Starr** によるアイヌと日本人の比較や見物人の感想を紹介しています。

○**Frederic Starr** アイヌと日本人の比較 (p.118) :

「両者の相違極めて顕著なり、白色の皮膚、多量の体毛および頬髯、波縮せる頭髮とその楕円形なる載面、水平眼とその鋭き眼光、その高低ある顔面・・・すべて此等の諸点に於てアイヌの日本人と異なること甚だしく彼らはむしろ欧羅巴人種の白人に類するなり。」

○見物人 (p.181) : 「彼の黒き美わしき曲がれる頭髮・・・その恭しげなる髭髯・・・恰も聖書人物の如し」

ここから「アイヌ白人説」が出てきたのですよ。ヨーロッパの人達も日本人も、アイヌは白人だと思うようになりました。アイヌはキリスト教徒ではないですが、非常に好意的に見て、褒めています。

(注) 田辺 陽子(たなべ ようこ) : 横浜市出身。UCL ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン教育研究所 (IOE) 博士課程在籍。早稲田大学教育学部英語英文学科、同アジア太平洋研究科 (国際関係学修士)、コロンビア大学教育大学院 (教育学修士) 修了。専門は少数・先住民族の言語及び教育政策。編著書に『聖路易通信—1904 年セントルイス万国博覧会「アイヌ村」からの便り』(かまくら春秋社、2016 年)。

アイヌ白人説の否定

古典的な人種の分類法は皮膚の色(白、黄、黒)によるなど、科学的とはいえないものでした。

(アイヌ人の顔は彫りが深く、立派な髯を蓄えている写真を映写)

この顔をどこかで見たことがあるでしょう、ロシアの文豪トルストイです。アイクシュテットというドイツの人類学者が書いた人種学の教科書のアイヌの項の冒頭に掲載されている写真で、アイヌは白人に分類されています。私は当時学生でしたが、人種学は学問としておかしいと思っていましたが、立証が出来ませんでした。いずれ DNA による遺伝子の研究ができる時代になれば、この白人説の真偽がはっきりすると信じておりました。

1960 年代の当時、まだ DNA そのものを人類学の実験室で用いることができませんでした。しかし、血液のタンパク質の個人差を電気泳動という方法で分析すると、間接的ですが DNA の個人差の情報が得られることがわかってきました。たまたま、2001 年から 2004 年までドイツに留学し、この方法を習得することができました。

ドイツから帰国した 1964 年に国際生物学事業という国際プロジェクトが始まり、その一環で文部省の特定研究「ヒトの地理的多様性と適応」に参加することができました。1966 年から 6 年間、北海道日高地方のアイヌ系住民について、夢見ていた遺伝的起源の研究をすることになりました。上述のように当時は

DNAの変異を直接調べる技術がなく、タンパク質の変異から間接的に調べることにしました。

協力して下さったアイヌの方々の血液試料から、何種類ものタンパクの検体を電気泳動法で調べていきました。

ところで、こうして得られた遺伝子の個体変異のデータを統計的に分析して集団間の系統樹にまとめるには、当然コンピューターを必要とします。今なら信じられないでしょうが、1960年代末に東大では自由にコンピューターが使えなかったのです。しかし、幸運なことにちょうどその頃オーストラリア国立大学から招待されてコンピューターを使うことができました。

こうして、完成したのが次の図の「アイヌの人々の遺伝的起源を示す分子系統樹」です。1972年に国際学会で発表しましたが、世界で初めて遺伝子のデータでアイヌ白人説を否定しました。

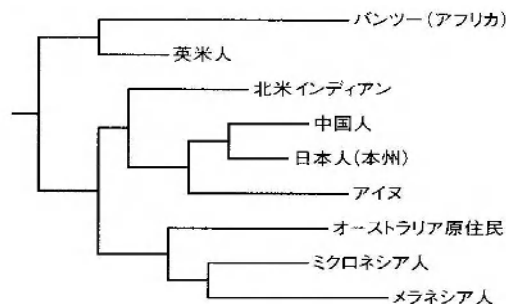


図13 アイヌの人種的位置を示す系統樹
キャヴァリ・スフォルザの方法による遺伝距離に基づく
系統樹。アイヌは明らかにモンゴロイドの群に含まれる
(*13文献による)

この図から分かることは

- ① バンツー（アフリカ人）と英米人は一つの枝から分かれた。
- ② アジア系では一つの枝から北米インディアン、次にアイヌ、次に中国人と日本人（本州）が分かれている。アイヌは英米人の系統ではなく、日本列島の先住民であろうと考えられます。
- ③ オーストラリア原住民、ミクロネシア人、メラネシア人は全く別な枝であり、日本人の祖先と考える埴原先生の二重構造説に合わないことになります。

【休 憩】

アイヌ民族と日本国（尾本 2019. 2. 22）

江戸時代から現代までの主な出来事は次のようです。

① 寛文9（1669）年 シャクシャインの戦い

松前藩の搾取に抵抗して戦ったシャクシャインは大した人物で、彼が蜂起すると各地のアイヌが立ち上がり、松前藩はあわやというところまでいったのですが、松前藩は策略を用いて和議を申し出、講和の席の酒に毒を入れ殺したのです。アイヌは一度口にした言葉には霊が宿る、それを言霊（ことだま）と言い、口にした約束をたがえることはしません。それを悪用した人間に対し、アイヌの呼びとは今も怒っています。

② 明治32（1899）年 北海道旧土人保護法

保護法とは名ばかりで、この法律の実態はアイヌの文化を否定し、日本の文化を強制したのです（同化政策）。アイヌ文化の象徴は狩猟で、主にサケとシカを生活の糧にしているが、これをやめ米を作れと指導したのですが、いきなり言ってもできるわけではない。同化政策を一方的に押し付けたのです。

③ 平成 5 (1993) 年 先住民族の権利に関する国連宣言

初めて先住民族の権利を国連で議論して決めたのです。国連は各国に批准を要請したが、日本が批准したのは平成 19 (2007) 年で国連決議から 14 年も後のことでした。腹立たしいことです。どうして国連が決めたことを日本は採択できないのか。日本は単一民族国家だと言った総理大臣がいたが、国連決議を批准すると総理大臣が嘘を言ったことになるので知らぬ顔をしたのでしょうか。

④ 平成 9 (1997) 年 アイヌ新法 (アイヌ文化振興法)

アイヌは日本の少数民族であることを初めて国が認めました。それまで、アイヌの人びとを「少数民族」と言っても、「先住民族」とは絶対に言わなかった。「先住民族」というと今までの虐待を補償しなければならなくなる。植民地主義を認めねばならない。

⑤ 平成 9 (1997) 年 二風谷ダム判決 (札幌地裁)

アイヌの人びとが住んでいた北海道沙流郡平取 (びらとり) 町の沙流川本流中流部に治水と利水を目的に二風谷 (にぶたに) ダムが建設されたが、建設に際し水没予定地に住むアイヌ民族との軋轢がダム建設差し止め訴訟に発展、結果は原告が勝訴したのです。札幌地裁の裁判長はアイヌ民族のことをよく理解し、この地はアイヌ民族にとって聖地である。そこへダムを建設することは許されないと、はっきり言ったのです。このころから国はアイヌの先住性をようやく認めるようになりました。

⑥ 平成 20 (2008) 年 アイヌ民族を日本国の先住民とする国会決議がなされました。

⑦ 令和 2 (2020) 年 4 月 白老 (しらおい) 町に国立アイヌ民族博物館が開館する予定です。

国の対応は変わってきたように見えますが、どうも表面的なことにとどまっている感じがします。

ほんとに先住民族というもの、狩猟採集民としてのアイヌを理解して守っていこうとするものではないように感じています。

アイヌ研究の倫理的問題

倫理上の問題もありました。一番の問題は医学部、解剖学教室などに保存されているアイヌ人の骨格標本の扱いです。昔、アイヌ人の墓を掘り返して骨を持ち帰り、展示するという、ひどい例がありました。特に北大の解剖学教室には多くのアイヌ人骨が保管されています。アイヌはその返還を要求し、北大は近年前向きに対応するようになってきたが、まだ完全に問題が解消したわけではありません。

私は DNA 分析のためアイヌの人びとに血液を提供してもらいましたが、その血液の返還を求める意見もあります。人骨と同じだということです。しかし、研究上両者は非常に違うのです。人骨標本は、個人情報を知る目的のため一個でも研究対象になります。しかし、我々が扱う血液 (DNA) は個人情報を知るためではなく、一人だけ調べても意味がありません。それは、集団の情報を得るために 10 人、ときには 100 人と、多くの試料を分析し統計的に集団の特性を知るのです。また、血液 (DNA) は人骨と違って冷凍保存せねばならず、かりに返還を求められても保管をどうされるのか疑問です。

むしろ、過去の人類学研究で反省すべきことは、インフォームド・コンセント (説明と同意) が充分でなかったことです。現在では、被験者の一人ひとりに研究の目的や意義を丁寧に説明することが倫理規定に書かれています。しかし、私が血液を集めた 1980 年以前のころは、集団のリーダーや地元の医師などの協力者には研究内容を説明しましたが、採血する一人ひとりに説明することはしませんでした。今なら倫理規定違反ということになります。

一方、アイヌの人たちの中には、人類学者がアイヌを利用搾取する悪者と考える人がいます。非常に残念なことです。これは、今まで人類学者がアイヌの人たちに研究の目的を分かりやすく説明してこなかったことも原因です。形態学や遺伝学の話をしてもらえなかったら、と考えたのです。

以前、札幌でアイヌの人たちを含む聴衆に対する講演をしたことがあります。私は、アイヌ白人説の

否定を題材に、採血を含む研究はアイヌの人々の起源を明らかにするために行っている。アイヌの人々も、民族の誇りのために、単なる想像ではなく、自己の起源・由来を知ることが必要ではないでしょうか、と述べました。すると、最初は疑い深い顔をして聞いていた一人の年配のアイヌ男性が、講義の終わりに私の所にやってきて、「わかった。協力しよう」と言われたのには驚きました。

松浦武四郎

アイヌの人たちが大好きな日本人がいますが、ご存じですか？ 松浦武四郎です。幕府の命令で北海道の地図を作るためアイヌの村に泊まり込みで調査を続け、道内をくまなく歩きました。北海道という地名も彼の命名です。なぜアイヌ人が松浦を好きかというと、心底アイヌのために働いたからです。北海道での仕事が終わると、アイヌの悲惨な状況を文書にまとめ、幕府に提出しました。虐待、酷使、女性の凌辱など、ありのままに記載し改善をもとめましたが、幕府は取り上げることはしませんでした。4月に開館するアイヌ博物館で松浦をどのように紹介するか、楽しみです。

5. フィリピンの First People: Negrito

いまから2～4万年前の最終氷期のころ、海水面低下により現在のインドネシアの島々はアジア大陸の一部となり、スンダランドといわれる。5～6万年前にアフリカを出た人々はスンダランドを経由してフィリピンにやってきた。このフィリピン最初のヒトはネグリト（小さな黒人）といわれます。ルソン島のアエタ、アグタ、ミンダナオ島のママヌワなどいくつかの民族集団に分かれます。

（1976年にルソン島に調査に行ったときの写真を映写）

アエタ族の人達の身長は男で150cmほど、女性は130cmほどで、非常に小さいです。皮膚色は黒くて髪の毛は縮れています。1982年にはルソン島北部パラナンのアグタ族の猟師3人に山の中で出あいました（その時の写真を映写）。イノシシ狩の途中だったようで弓矢をもっていました、全く平和的な人たちでした。小柄ながら肌はつるつるでアトピーなど無関係の健康状態でした。

私は、1976年から10年間ほどかけて、フィリピン各地のネグリトの6民族の遺伝的起源を調べ、互いの近縁関係を示す系統図を発表しました。この中ミンダナオ島のママヌワ族はネグリトの一部族ですが、この人達だけ渡来時期が古いとみています。

ミンダナオ島の一番北にスリガオ市があり、1978年にこの近くの山中で100名くらいのママヌワ住民を調査しました。最近、2012年にスリガオ市で「ママヌワとの対話」というシンポジウムがあり、招待された機会に30年前の調査地を訪れたところ、アッと驚きました。当時ママヌワ族が住んでいた森は消え、トラックが土ほこりをあげて走り回っています。ニッケルの採鉱だそうで、そこに住んでいたママヌワの人びとは全員麓の村に移住させられたとのこと。（ビデオ「スマホの真実」(PARC)から写真2枚を紹介）

話を聞くと、住友金属鉱山が出資する現地法人によって大規模なニッケル鉱山開発が行われ、森林や川や海岸の環境破壊が起きている。移転を強いられた住民に対する代替措置として住居や学校や病院が建てられているが、住民がみな喜んでいとは限らない。法律によって鉱山会社は収益の1割にあたる巨額の補償金を対象住民に払うことになっているが、実はこれが汚職や流血を伴う抗争のもとになっています。

2017年のことです。ママヌワ族の若いリーダー、ニコ・デラメンテ（27才）が暗殺されました。彼は、上述の補償金を払わない中国系の鉱山会社に対する抗議活動をしていたところ、白昼バイクで町にやってきた犯人に公衆の前で射殺され、犯人はいまだに逮捕されないままです。

住友金属鉱山会社は、補償金以外にも移転を強いられたママヌワ族の住民のために、山の麓に住宅のほか集会所、学校、病院などを建ててあげました。このこと自体は人道的に褒めるべきことと思います。

しかし、ママヌワの人達がどれだけ喜んでいのかというと、問題は複雑です。2014年にママヌワの代表者

たちが「権利宣言」という文書を公にしました。下は、その最終部分を私が訳したものです。

- ・終わりに、祖先伝来の土地を開発する鉱山会社が法に基づいて支払う使用料（ロイヤリティー）によって我々の生活が良い方向に変わったと考えるのは大きな誤りである。
- ・それは、われわれの民族としての存在の終焉と引き換えるには、余りにも少ない額である。
- ・いままでおとなしい民族として知られてきたわれわれママヌワ族の人たちの中には、今や団結して戦おうというものもいる。

このようにしてテロが起きるのです。「テロはいかん」というのは国家権力の口実であって、なぜテロが起こるのか、止むにやまれず起きるテロもあるということを考えてみる必要があります。

採集狩猟民は文明の落ちこぼれか？

おそらくアメリカのトランプ氏ならそう言うでしょうね。でも、

- そうではない。それは「野蛮」から「文明」へという偏見からくる誤った「発展段階説」である。
- 彼（彼女）らは「ヒトの原点の生き証人」であり、いわゆる文明人に侵略された先住民族である。
- 狩猟採取民の生活様式の中には、進み過ぎた現代機械文明社会が学ぶべきものがある。
- この人びとのことを研究・理解し、広報し力をかすことができるのは人類学者だけである。
- 絶滅危惧民族を救おう。

ママヌワ族の人口はおよそ 8 千人で、独自の言語も減少し、民族として目立たない存在です。今、生物多様性が大いに叫ばれていて、「絶滅危惧種を救へ」と言われます。しかしそれも大事ですが、「絶滅危惧民族」は放っておいてよいのでしょうか。

現代に生きる狩猟採集民

- 約 1 万年前の世界人口はおよそ 700 万人と推定されます。すべて狩猟採集民でした。
- 現在、狩猟採集民はほぼ 40 民族、総人口約 70 万人と推定されます。ヒト総人口の約 1 万分の 1 です。
- 単純計算では、狩猟採集民は 1/10 に減ったことになります。減少の原因は土地を広げて拡散した農耕民の圧迫だけでなく、ヨーロッパ人などがもたらした伝染病によると思われます。

狩猟採集民に学ぶべきこと

狩猟採集民の行動や心理には、現代のいわゆる文明人が忘れてしまったヒトの原点というべきものがあります。私自身が見聞きしたり、いろんな本から学んだり、友人から話を聞いたことをあげてみます。

- 小さいことはよいことだ。

現代文明は「発達＝大型化」という経済学的特徴を持っています。たとえば、強く富んだ国家は大きくなる傾向があります。しかし狩猟採集民の人たちは反対です。なんでも大きくなれば危ないということを知っており、決して大きくしようとはしない。

今、小さいほうがよいと言っている国があるとすれば、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、アイスランド、フィンランドなど小さいが高い文化をもつ北欧諸国でしょう。ある意味で狩猟採集民に似ています。

- 土地はもともと私有する物ではなく、皆で共同利用する物だった。私は、歴史上、土地の私有が始まったとき人間の差別が始まったと思っています。
- 食物や他の品物は完全に平等配分する。
- 食事は家族や仲間と「共食」する。（コミュニケーションの手段）

私がママヌワの人たちに「日本の子どもたちは孤食だ」と話したことがある。「一人、塾から帰って明かりをつけ、お母さんのメモを見て食事を温めて一人で食べ、食後は自室で勉強する」というと、どっと笑いが起きた。また「なんてひどい生活だ」と軽蔑される始末だった。ほんとに恥ずかしかった。今子供をめぐりいろいろな問題が起こっているが、その原因の一つは孤食にあると思います。ヨーロッパはまだ共食で、親は食事の時間には帰宅していますね。文部科学省は子供の孤食をやめさせること。

○リーダーは必要だが身分や階級は不要だ。

○男女の権利は平等だが、役割の分担はある。

狩猟採集民は一夫多妻と言われることがあるが、そうではない。むしろ農耕民や牧畜民に見られる。

○アニミズム（精霊信仰＝自然への深い知識と畏敬の念）は宗教の原点である。一神教とは違う。

ヒトに未来はあるか

非常に疑問に思っています。現代文明の問題点は次のようなものです。

○人口増大：1 万年前 700 万人、現在 70 億人。このようなことは他の生物には起こらない。バッタは一時的に大繁殖することがあるが、食物がなくなり増え続けることはない。

○格差と分断：南北問題、支配・被支配、階級制

○際限なき経済発展：欲望のままに、一握りの成功者が富を独占 ⇒ 貧富差の象徴

○戦争：これからはテロが主流になる。

○難民問題、その他の人権問題、文化相対主義；

文化相対主義とは、どの文化も等しく重要だ、よい文化、悪い文化というものはないという考え方である。ところが、アフリカの通過儀礼に男の割礼があるのをご存じと思うが、女性にもあり、子どもを生めない体になることもある。このような悪習を止めさせることができず、悪い文化の一つではないか。

○その他：自然災害、原子力の乱用、過密からくるストレス、暴力拡大、情報爆発（IT、AI）。

○パンデミック

この度の新型コロナウイルスによる感染症拡大をウイルスのせいにするのは間違いです。ウイルスの突然変異はどこでも起ることで、たまたま人口の多いところで感染し、人が世界中動くことであっというまに拡がるのです。

ジュリアン・ハクスレー（1887-1975）：ヒトは進化を自己修復する能力をもつ

彼は、進化論に基づくヒューマニズムを説き、1963 年、4 段階の進化について次のように言っています。

① 宇宙の進化：物質や星の変化

② 生物の進化：DNA の変化

③ 人類の進化：「文化」依存性の変化

④ 自己修復（規制）する進化

科学、とくに進化論によって人間は自己を客観的にみることができるようになり、現代人は、未来に向けて自己の進化を規制する潜在能力を持つようになったという。この問題をテーマに 2018 年に東京で谷口正次先生らと「自己規制する文明は可能か」というシンポジウムを行いました。考え方は面白いが、実現はできそうにないとの意見が多いようでした。

ハクスレーの進化論的ヒューマニズムには問題があり、それは優生学の危険性をはらんでいることです。彼はユネスコの初代事務局長をした素晴らしい人ですが、著作を読むと「優良な民族」という言葉が出てきます。でも当時として仕方のないことであつたかも知れません。「優生学」なるものが日本にも、イギリスにもあつた時代のことです。

1973 年という年は、人間の文明とか環境などに大きな自己批判が起きた年です。

レイチェル・カーソンが「沈黙の春」で DDT の害を説き、また、K・ローレンツが「文明化した人類の 8 つの大罪」で、1. 人口過剰、2. 自然破壊、3. 競争激化、4. 感性・情熱の萎縮、5. 遺伝的衰弱、6. 伝統の破壊、7. 教化、8. 軍縮・核兵器を取り上げ論評しています。

また、ローマクラブは現在のまま人口増加や環境破壊が続けば、資源の枯渇（あと 20 年で石油が枯渇する）や環境の悪化によって 100 年以内に人類の成長は限界に達すると警告しており、破局を回避するためには地球が無限であることを前提とした従来の経済のあり方を見直し、世界的な均衡を目指す必要があると論じ、団体としてドイツ出版協会平和賞を受賞しました。

人類学は役に立たない学問か

人類学の一般的研究テーマは化石人類の系譜、DNA による日本人の起源、縄文と弥生文化、稲作の起源、アジアの文化多様性などです。これらは人類学者および一部の一般人の興味をひくし、ヒトの特異性、多様性、歴史性に関する重要な情報を伝えるが、これらの研究は「ヒトは何处へ行くのか？」（人類の未来）という問いに対してほとんど何も答ええないのです。

今までの人類学は、先史時代からの進化史に注目してきたが、今や法則性より多様性と起源を重視（自然史科学）した「現代文明下のヒト」という研究テーマが必要ではないかと考えています。

人類学は、医学をのぞけば「われわれ自身」であるヒトとその文化を研究対象とする唯一の科学であり、被検者は単に検査や研究の対象としてではなく、共感、相互理解などの心情をもって接し、人間性 (humanity) を大切にし、人権 (human rights) を重視しなければなりません。とくに、狩猟採集民のように一般の人から「忘れられた」人びとのことを世に知らせ、この人々の絶滅を防ぐのが人類学者の役割です。学生たちに人類学者は「頭」と「手」と「足」を使うべしと教えてきましたが、最近になって、四番目に「心」も大事だと思うようになりました。

人類学はヒトを通して自然科学と文化・社会科学の両者を結合させ、学際的総合学になしうるが、我が国の教育制度では総合的人類学は育たないのが残念なところです。

ご清聴ありがとうございました。

【田中克先生コメント】

地球環境自然学講座の本年度のテーマを「原点を探る」に定めました。本日のお話はまさにアイヌやネグリの人びとなどが狩猟採集民としてどう生きてきたか、彼らから学ぶべきことは何か、現地での長期間調査に当たってこられた尾本先生ならではの貴重なお話しは、本年度の本講座のまとめとしてふさわしいものであると痛感しました。お聞きできたこと、また、11 月に谷口正次先生からもお聞きしたように電気自動車の急速な普及という二酸化炭素を発生しない環境に配慮した社会への転換の陰で、銅やリチウムイオン電池、スマホに使うレアメタルの争奪戦の結果、これらの産出現場では狩猟採集民が生活の基盤を取り上げられ、人権を無視された生活を余儀なくされていることや自然が急速に失われている不都合な事実は殆ど知らされることがないことに改めて愕然とさせられました。先住民の犠牲のもとに便利な生活をする文明人に果たして未来はあるのか、今こそ自己規制が必要ではないかとの思いでお聞きしました。尾本先生は人間性、人権をなによりも大切にする反骨精神あふれる人類学者との認識を新たにしました。本日はまことにありがとうございました。

以上